

## 高津区おはなしアーカイブ

- 河原 勇 (かわはら いさむ) さん  
昭和14年生まれ 79歳  
川崎市高津区宇奈根在住



### ◆生い立ちと家族構成

宇奈根で生まれて、育ったのも宇奈根です。私が生まれたその日に曾祖母が亡くなったので、生まれ変わりと言われていました。姉、私、妹が2人の4人姉弟。農家に生まれましたから、長男として家を継ぐようにと育てられました。

親父はのんびり屋でした。周囲のことはあまり気にせず、自分は自分、農家の跡取り息子、何代目だったのか知らないのですが、とにかくのんびり屋でした。けれど人から頼まれるといやと言えない所もあり、苦労しました。その親父が脳卒中で倒れたときは、私はまだ21歳、親父はまだ55歳。この家を守らなくて

はならないという責任を感じ、頑張ってきました。

お袋は梶ヶ谷から嫁いできました。詳しく聞いてないけれど、お見合じゃなくて、恋愛結婚だったみたいです。それほど魅力のある親父じゃなかったと思うのですがね(笑)。お袋はすごく優しいところがありました。ただ、この家に嫁いでは苦労ばかり。私が生まれたときに亡くなった曾祖母は享年91歳でしたが、祖母がその曾祖母の面倒をみなかったので、嫁いできたお袋が、私が生まれるまで世話をしていたそうです。私が中学3年生の時に77歳で亡くなった祖母もリウマチだったので、その面倒もお袋が見ていましたし、脳卒中で倒れた親父の面倒も見た。3人の面倒を見ながら、農家の仕事もしていたのですから、計り知れない苦労があったと思います。母は6年前、95歳で亡くなりました。

昔からここで農家をしていましたが、作付けする作物やその数は時代の流れによって変わってきました。桃を育てていた時期も知っています。その前は養蚕もやっていたらしく、道具は家にいろいろ残っていましたが、実際に扱った記憶はないのです。桃からはじまって、野菜になって、鶏、畜産ですね。今は畜産もやめました。

### ◆小学校

小学校は高津小学校です。我々の頃は子どもの人数が多かったんですよ。1クラス50人くらいで8クラス。

終戦が昭和20年で、私はその当時小学2年生でした。粉ミルクだとかパンだ

とか給食的なものを食べた思い出があります。何年間食べたかは、記憶が定かではないのですが。高学年になったときには弁当を持って行っておりました。6年生のとき、辛い話だけど、お米があんまり取れなくて麦を混ぜて炊いていた。麦を混ぜて炊いたご飯は麦が上に、下に米がのこる、その下のほうのお米の多いところをお袋はお弁当に入れてくれた。そんな苦労もあったみたいです。おかずも、これといったものはなく、ご飯の間に海苔をはさんでくれて、またその上にでんぶとか、鯉節、梅干したとかそんなものですよ。お弁当食べていると隣の人が見たことがないようなものを食べている、うまそうだなあって思った記憶はあります。卵焼きは鶏がいたからよく作ってくれたな。

#### ◆戦時中の思い出

空襲警報が鳴ると家の前に掘った防空壕へ逃げ込みました。防空壕と言っても、ただ穴を掘って、上に竹を乗せて土を被せたみたいなもので、爆弾が落ちれば一発で駄目になっていたと思います。空襲警報は絶えずありました。祖母は具合が悪かったから、お袋が背負ってしょっちゅう防空壕を出たり入ったりしていました。

一度飛行機が火を噴きながら飛んでいるのを見ました。あとパラシュートが落ちてきた。パラシュートには衣類だけがついていて、人はいなかったのですがこの近くに落ちたんです。そのときは若い者が竹槍を持って向かっていきました。もし人がいたら酷いことをしてしまった

かもしれない。そんなこともありました。

それから多摩川に戦闘機が落ちたこともあるんですよ。そのときパイロットの物じゃないかなと思うんだけどゴーグルみたいな大きなメガネを河原で拾って、隣に住んでいる担当者の家に持って行きました。

松枝伍長の戦闘機も多摩川に墜落したのです。メガネは吹っ飛んでいましたが、飛行機はちゃんと原形をとどめていた。それをトラックに乗せて持って行くのを川のこちら側から見ました。小学校1〜2年の頃の記憶ですから定かではないのですけど。

あとは、焼夷弾が落ちていますよ。六角形で中に油が入っていてね。そういうものも拾っては担当者のところに持っていくんです。担当者のところにはそういうものが山積みされていました。その当時どう処理したのかは分からないですけど。

津田山に高射砲部隊があったので、米軍機が飛んでくるとそこからドカンと撃つのです。でも、届かない。B29は4〜5、000メートルくらい上を飛んでいるのだから届くわけがない。終戦間際に不発弾が一発うちの畑に落ちました。子ども心にそのことを覚えており、20年くらい前に、その土地に家を建てると言うので、不発弾が畑に落ちたことを思い出し、自衛隊に掘ってもらったの。朝霞の自衛隊処理班がきてくれて、実際に不発弾が見つかって処理してくれました。30センチくらいの大ききなのだけど、破裂したら大変だから、すごく慎重に撤去してくれました。それで安心して

家が建てられましたね。

玉音放送は聞いた記憶があります。戦争が終わったと言うより、負けちゃったんだ、これからどうなるのだろうと思いました。私たちはアメリカ軍の奴隷になるんだと思った。これでおしまいなのだ、そんな気がしました。本当に、涙も出なかった。奴隷という言葉はどこから聞いたのかは解らないけれど、そういうふうに思いました。捕虜という考えはなかったです、まず奴隷になると思った。

#### ◆子どもの頃の思い出

小学校2年か3年の時は、当たり前のように多摩川で遊んでいました。あの頃は泳いでもいいことになっていたと思うんです。お袋は農業で一生懸命草むしりして、僕が帰ってくるのを待っているのですが、夕方まで泳いでいて、よく叱られた。

小学校6年生の時、先生が多摩川に連れて行ってきて、水泳をやったことがあるんです。先生も怖かったと思いますよ。流されちゃったら大変だって。多摩川で先生と泳いだ記憶があります。

中学校は高津中学校。今もありますよね、高津中学。あそこまで歩いて行くと30分くらいかかっていたんですね。

遠足はね、平塚海岸、箱根の芦ノ湖、相模湖とかに電車で行きました。あの頃芦ノ湖なんて遠くに感じましたよ。

昔は、今みたいな瓦屋根じゃなくて、藁葺きの屋根だったから。3～4年ごとに葺き替えるのが大変でした。茅葺きは1度葺くと30年くらいもつのですが、うちは小麦の藁でしたからすぐ腐っちゃ

うんですよ。だから絶えず入れ替えないと駄目でした。親父はのんびりながらもそれを治して、私もそれを手伝っていたので、屋根の葺き方も覚えています。雨が降ると雨漏りがしてね、天井に上がって雨の漏る縄を確認します。藁を止めている縄が腐るとそこから雨水が垂れてくるので、その縄をとってしまう。そうすると雨漏りが止まるのです。20才の時だったかな、瓦屋根になった時にはもう雨漏りの心配をしなくいいのだと、ずいぶん気が楽になりました。

#### ◆宇奈根

宇奈根は元々の本村が東京なんですね。最初に東京から川崎に移ったのは4軒だったという話です。今でも旧家は14軒あるのですが、そこから分かれた河原姓と河崎姓は結構この集落には軒数ありますね。昔はお祭りも東京から神輿や太鼓を船に積んで持ってきていた。当時もっと多摩川は水も多くて幅も広がったから、船じゃないと持ってこられなかった。その船は砂利船っていつてね。浅くて幅が広いので荷物を乗せるのが楽。私も小学校1年か学校に上がる前だったかな。その船の淵に座って川の水をバシャバシャ触りながら多摩川を渡った記憶がありません。東京から持ってきていた期間は短かったと思います。その後はこちらにも氷川神社が建ちました。

渡し船をやっていた期間がどのくらいあったのかはわかりませんが、隣にお爺さんがいて、その人が親代々船頭をやっていました。高津区内の多摩川で考えてみると、4、5箇所くらい渡し場があっ

たみたいですね。



(多摩川河川敷にある宇奈根の渡跡)

### ◆学校卒業後

中学校を卒業後は、家の仕事を手伝いました。畑で取れた作物を市場に売りに行くのです。一番遠くは中里、三軒茶屋の手前までリヤカーで行きました。瀬田の坂を出て、用賀の坂を上ってえっちらおっちら。親父がリヤカーを押してくれて、朝2時頃一緒に行きました。とにかく眠くて眠くて、辛い時もありました。リヤカーだとおそらく2時間以上はかかっていたでしょう。市場に着いた時はまだ周辺は真っ暗で、野菜を卸して帰る頃ようやく明るくなって来る。帰ってきてから、また畑に行って野菜をとって、荷造りをして。また次の朝も行くという感じでした。近くにも市場があり、溝口や瀬田用賀にあった市場などにも行っていました。

農業で生計を立てるといのは、生産したものを市場に出して、お金にするわけですから、なんの信用も無いわけです。生活の苦しさというのはいも感じ、知っています。当時はカブ、それからトキナシダイコン。夏はカメイドダイコンとい

う人参みたいな細い大根その他数種類。これは、この土地に合っていたから主力でやっていたと思います。カブは秋頃、寒くなる季節に、葦簀（よしず）を南向きに斜めに並べた中に種を蒔き、雪が降っても霜が降りても葦簀で止まるようにしていました。あとは小松菜やトキナシダイコンくらいです。

うちの親父はね、農業そのものをあんまり本気ではやらなかった。私が中学を出るのを待っていたようで、その前から今でいう、土木じゃないけど、コンクリートだとか家の基礎だとかということをやっていたみたい。なぜかという、多摩川に土手ができる前はよく氾濫していたらしいのです。そのために、多摩川の砂利を取って低くしようと。だから多摩川の砂利を掘って大師のほうまで船で運んでいたんです。砂利は戦後の復興でも使っていると思いますし、戦前もコンクリートに使っていると思います。親父はその多摩川の砂利の運搬に関わっていたようです。だから、そういった土木関係が好きになっちゃって、農業の傍、そういう仕事に従事していた。農外収入でも稼いでいたようです。

小学校高学年頃、仲間と、大井町線で二子橋を渡り自由が丘あたりまで遊びに行きました。母親から小遣いを100円もらってね。あのころ100円あれば行って帰ってこられるけど、映画を見るとなると100円じゃ足りない。150円くらいいるんですよ。でも100円しかないから、映画館の外で皆が出てくるのを待っていたりしてね。それが悔しくて家に帰ってきてお袋を責めたこともあり

ましたけど、お袋も辛かったのだろうなあ  
あと、今になって思います。



玉とか福島に移転し、その跡地には戸建てやマンションが建ちましたから、人口もずいぶんと増えたんじゃないですか。

(平成30年10月29日取材)

#### ◆周辺の景色や様子

子どもの頃は桃畑とか野菜畑が多く、少々家があったくらいです。何もなかった、家もなかった。宇奈根という地域は久地駅から少し歩くので、駅の周りは発展したけれど、この辺りはタヌキが出る、キツネが出るという印象が強かったです。取り残された離島みたいなところでした。

昭和30年代になると、この辺りは「準工業地域」に指定されたのです。そのころ東京辺りで工場の規制が有り、工場を建てて欲しいと東京からどんどん人が来ました。工場を建てるから土地を貸して欲しいと大騒ぎ。かなりの人数がこの宇奈根にやってきたのです。この地域だけでも200軒を超えるくらい工場があった時もありました。今は一部の工場が埼